西藏文倶舍論破我品譯（完結）

寺本婉雅
山口益

犢子部我を破する中、四種無記說と輪廻と憶知・記知とに就いて、

——對數論——對勝論。

世間常住等問、佛亦不レ記、由レ觀二問人意一故、若彼執レ我爲二世間一、此無故、四答不レ應レ理、若彼執二一切生死一名二世間一、答レ此亦不レ應レ理何以故、若世間常住、無三一人得二般涅槃一、若非二常住一則一切皆斷滅、自然般涅槃、若具二必定、一分不レ得二涅槃一、一分自得

何緣不レ記二世間常等一、亦觀二問者阿世耶一故、問者若執レ我爲二世間一、我體都無故四記皆非レ理、若執二生死一皆名二世間一、佛四種記亦皆非レ理、謂若常者無レ得二涅槃一、若是非常便自斷滅、不レ由二功力一咸得二涅槃一、若說爲二常亦非常一者、定應下一分無得二涅槃一一分有情自證中

又世間は常なりと言はるゝ等は、問者の意樂（bSam-Pa; ājaya 阿世耶）に觀待するが故に記せられざりき。且く若し世間は我なりと稱せば、その我は無なるが故に四種の記は共に不道理なり。若し世間は一切の輪廻なりと言はゞそは又理にあらず。世間常ならば何者も般涅槃（Yoṅs-su mya-Ṅan-Las ḥDaḥ-Ba）せざるべし。非常ならば一切は斷滅すべし。二者（常にして亦非常）の如くんば、或者は決定して般涅槃を成じ、或者は涅槃を成せざるべし。二者の如くにあらずんば般涅槃するに

若非二、應成二非得涅槃非非得涅槃一、由二涅槃至得隨屬道一故、是故不可定爲二四答一、譬如不記二尼乾弟子握中之雀一、由二此義一世間有邊等四問、佛亦不記、此四問同二前四義一故、

何以知然、有二外道一名二郁底柯一、以二此四一問佛、復問、爲一切世間由二此道一得出離、爲二世間一分一、大德阿難言、郁底柯、是義汝於初已問二世尊一、今何故、復以二方便一更問二此義一、

如來有異死等四問、圓寂、若記二非常非非常一者、則非得二涅槃一、非不得二涅槃一、決定相違便成二戲論一、然依二聖道一可二般涅槃一、故四定記皆不應理、如離繫子問二雀死生一、佛知二彼心一不二爲定記一有邊等四亦不記者、以同二常等一皆有失故、

寧知此四義同二常等一、以有二外道名二唱底迦一、先問二世間有邊等四一、復設二方便一矯問二世尊一、爲諸世間皆由二聖道一能得出離爲二一分一耶、尊者阿難因告彼曰、汝以二此事一已問二世尊一、今復何緣改名重問、故知後四義與前同、

復以二何緣一世尊不記

もあらず又般涅槃せざるにもあらざるべし。その故に般涅槃は(正)道に依るが故に尙四種共に決定して記せず。聲聞離繫子(gCer-Bu pa; nirgrantha 尼乾子)によりて雀の捕へられたるが如し。その故に世間邊際を具すると云はるゝ等の四種も亦記せられざりき。此四部は義(前に)同じ。

此の如く遍行者(遊行者)唱底迦(Smra-Byed;uktika=uttika)によりても亦此四部は問はれて、「世間の一切は、此道に依りて出離(Nes-Par ḥByuṅ-Ba)すべきや、或は世間の一分は(出離)するや」と問はれたる時、長老阿難(gNas-bRtan kun-ḥGaḥ-Bo)によりて「唱底迦よ、汝によりて世尊にまで最初に問が問はれたる所のその同じきことを今別の門を以て問ふや」と言へり。

如來(De-bShin-Hoṅs-pa)は死を越えて

由レ觀二問人意一故、佛亦不レ記、何以故、彼人執二已解脱我一名二如來一、故爲二此問一、於二執レ有レ我人一、應レ作二如レ此問一、云何世尊記二生存人有一、不レ記下於二異死人一有上、爲レ離レ墮二常過失一故、此事云何記、佛言彌底知履反履也、今汝於二未來一當レ成二如來阿羅訶三藐三佛陀一、復云何聲聞過已死於レ後生、記レ彼言、某甲某處受レ生、如レ此亦應レ墮二常過失一、若世尊先時見二衆生存在一、般涅槃已則不二復見一故不レ記者、此應下由二無明一故不レ記則撥二大師一切智德一、汝或應レ信二受此義一、謂由二我如來死後有等四一耶、亦觀二問者阿世耶一故、問者妄計二已解脱我一、名爲二如來一而發問故今應レ詰下問計二有我一者上、佛何緣記レ有二現補特伽羅一、不レ記二如來死後亦有一、彼言下恐レ有レ墮二常失一故上、若爾何緣佛記下慈氏汝於二來世一當レ得中作佛上、及記三弟子身壞命終某甲今時已生二某處一、此豈非レ有二墮一、常過失一、若佛先見二補特伽羅一、彼涅槃已便不二復見一、以レ不レ知故不レ記有者、則撥三大師具二一切智一、或應レ許三不記由二我體都無一、若謂二世尊見而不レ說、則有二離蘊及常住過一、若見非見俱不可說、則應二漸言一、不レ彼處に有りや否や」と言はるゝ此四部も亦問者の意樂に觀待するが故に記せられざりき。彼(問者)によりて解脱せられたる我を如來なりと思惟して問は問はれたり。諸の補特伽羅(を執ずる)ものを論難し詮議せらるべし。世尊によりて何故に、生存する(g'on-po)補特伽羅有りと記して、死を越えて彼處には記し給はざるや。常の過失に(墮するの)結果となるが故なり。然らば何故に「慈氏(Byams-pa)よ、汝は未來の時に如來、羅漢(dGra-bCom-pa; 殺賊)、正等覺者(Yan-Dag-Par Rdzogs-pa'i Sans-Rg'as)たるべし」と言はるゝ此を記するや。何故に彼樣の者(某甲)に生ぜりと過去世に死せる聲聞の生ずることを記するや。その如くならば常たるの失となるべし。若し又世尊によりて先に補特伽羅を見給ひつゝも、般涅槃し已りては復見給はず、知らざるが故に記し給はずと云はゞ、大師の一切智は撥除せられたるなり。或は其(我)は無なりと認許せらるべく要す。若し見給はゞ說き給

不レ有故佛不レ記、若佛見レ人不レ記、雖レ不レ記二此人一、是有亦是常住、此義自成、若汝說二此義一亦不レ可レ言、謂佛見及不見、若爾汝應下漸漸成二此義一、令中皆不レ可レ言、佛世尊是一切智不レ可レ言、非二一切智一亦不レ可レ言、

我必定有、由二此言一依レ實依レ住、撥レ我無我說名二見處一、說有亦是見處、是故此言不レ可二以爲レ證、阿毗達磨師說、此二皆是邊見、斷常二邊見所攝故、此言是理、如跋娑經中言、阿難若說二於我一、此人則墮二常見一、若說二無我一、此人則墮二斷見一

可レ說三佛是一切智、非二一切智一、

若謂乙實有二補特伽羅一、若以下契經言中諦故住故定執二無我一者墮中惡見處上故、此不レ成レ證、彼經亦說下定執二有我一者墮中惡見處上故、阿毗達磨諸論師言、執二我有無一俱邊見攝、如レ次墮二在常斷邊一故、彼師所說深爲レ應レ理、以下執二有我一則墮二常邊一、若執二無我一便墮中斷邊上前

はざる時と雖も而もそは有なり又常なりと云はると成就せられたるなり。若し見給ひ或は見給はずと言はるゝ此も亦說くべからざるものならば、その如くならば、今世尊は一切智なり、或は(一切智に)あらずと言はるゝ此も亦漸次に言はれざれ。

補特伽羅は有り、かくの如く諦(正)と住(不變)とに於て、我を無我なりと考ふは(邪)見の處なりと說かれたり。(論主曰稱友)有りと考ふることも亦(邪)見處なりと說かれたり、かるが故に此は根本に相應せず。諸の阿毗達磨師 (Chos-mNon-Pa-Pa) 曰く「此は雙ながら邊執なり、常と斷との見によりて攝せらるゝものなり」と言へり。實にその如く道理しつゝ筏蹉經によりて、「阿難よ、我有りと言はるゝは常たるべし。阿難よ、我無しと言はるゝは斷たるべし」と說かれたるが故なり。

若汝言、人無何物往二還生死一、何以故、生死自往還此義不レ可レ言、佛世尊說、諸衆生以二無明一爲レ蓋、貪愛爲レ縛、往還此彼一、或於二地獄一、或於二畜生餓鬼人天道中一、如レ此長夜受二於衆苦一、增二益貪愛一、常聚血滴、若爾此人云何往二還生死一、由下捨二此陰一、受中彼別陰上、汝今所立義、於レ前已破、若爾離レ人生死云何自往還、譬如下火刹那刹那滅、由二相續一故說レ行、如レ此陰聚、說名二衆生一、以二貪愛一爲レ取、約二相續一說名二往還一、

若世間唯是陰聚、云何佛世尊說、今我於二昔時一

若し補特伽羅無ならば此輪廻は誰の（誰に屬するもの）なるや。輪廻自ら輪廻することは有り得べからず。世尊によりても亦「諸の有情無明（Ma-Rig-Pa; 非明）の覆有り、有の結（Sred-Paḥi Kun-Tu-SByor-Ba）と愛の糸（Sred-Paḥi Srad-Bu）にまりて縛せられたる（原文 Kun-Tu-Rgyug-Pa とありて漢譯二本に對稱するに意味不明なるにより、今は寂天の疏文によりて譯す）もの輪廻す」と說かれたり。又補特伽羅は云何にして輪廻するや。別の蘊を棄て又取るが故なり。此宗（論點）は（前既に）答へ畢れり。凡そ火（原文の Mi 人は Me 火の誤謬）は刹那なりと雖も猶相續によりて往く如く、その如く愛を執取することと有る有情と言はるゝ蘊の聚は輪廻するなり。

若し此は「蘊有るもの」ならば何故に世尊によりて「吾は卽、彼の時に於て妙眼（Mig-

筏蹉經分明說故、

若定無二有二補特伽羅一、爲レ可レ說三何誰流二轉生死一、不レ應二生死自流轉一故、然薄伽梵於二契經中一、說三諸有情無明所レ覆貪愛所レ繫馳二流生死一、故應三定有二補特伽羅一、此復云何流二轉生死一、由下捨二前蘊一取中後蘊上故、如レ是義宗前已徵遣如下燎レ原火雖二刹那滅一而由二相續一說レ有二流轉一、如レ是蘊聚假說二有情一、愛取爲レ緣流二轉生死一、

若唯有レ蘊、何故世尊作二如レ是說一、今我於レ昔爲二

曾作二世師一、名曰二善目一、云何不レ應レ說レ如レ此、由二諸陰異故、若爾何者、有レ人若昔人卽是今人、人則常住、是故今我是昔世師、此言顯二一相續一、譬如二有言一、是於彼火燒然至レ此、

若我實有、唯諸佛如來能明了見、見已世尊卽立二我執一、今成二堅實一、我既是有我所亦成、由佛說レ經、爲レ顯二此義一、衆生於二五陰中一、生二我所執一、則成二堅實一、是彼於二五陰一則成二身見一、我所見有已、彼我所愛復成二堅實一、彼以二我所愛一、爲二堅實繫縛一、則於二解脫一轉成二極遠一、若汝言、於レ我不レ生二世導師一、名爲二妙眼一、此說何咎、蘊各異故、若爾是何物、謂補特伽羅、昔我卽今體應二常住一、故說二今我昔爲レ師言一、顯二昔與レ今是一相續一、如レ言三此火曾燒二彼事一、

若謂三決定有二眞實我一、則應二唯佛能明了觀一、觀已應レ生二堅固我執一、從二斯我執一我所執生、從レ此應レ生二我我所愛一、故薄伽梵作二如レ是言一、若執レ有我便執二我所一、執二我所一故、於二諸蘊中一便復發二生我我所愛一、薩迦耶見我愛所レ縛則爲レ謗レ佛、去二解脫一遠、若謂三於レ我不レ起二我愛一、此言無レ義、所

bZaṅ) と云はるゝ導師たりき」と說かれたるや。何故に說くべからざるべき。諸蘊異なるが故なり。爾らば何ものぞ、彼れ補特伽羅なれば常となるべし。かるが故に吾卽彼なりと云はるゝは、一相續の狀態なりと敎へ給ひしなり。譬へば(前に見たる所の一稱友)その同じき火燃燒して復來れりと言はるゝが如し。

若し又我有るべくんば、諸如來によりてのみ眞に明了に見給ふべし。見給はゞ又我執太だ堅固となるべし。「我有らば更に我所成ず」と(云ふ意味)は經中より出づるが故に、彼等(眞諦は「彼等」を原文より意譯して(?)「衆生」と譯したれども、耶輸密多羅及富樓那婆爾陀那釋論にはDe Ni De-Dag Gi ḥJig-Tshog La Lta-Ba Yin-No Shes-Bya-Ba-Ni De-Ni De-bShi-gCegs-Pa De-Dag-Gi bDag Dan bDag-Gi; 「其(我所執)はそれらの壞聚見なりと言はるゝは、そはそれら如來の我及我所」云々と釋して「彼等」を如來の事とせり。玄奘

我愛、此言應何道理、謂於無我由信有我起我愛、於實我不起我愛、是故於如來正法中、無因緣起見瘡疱、謂有諸人撥無我、起有我執、復有諸人撥有執一如無、是諸外道計、執我實有別物、正法內人起有我執、及執一切無、如此等人同不得解脫、由無差別故、

以者何、於非我中橫計爲我、容起我愛、非實我中、如是所言無理爲證、故彼於佛眞聖敎中、無有因緣起見瘡疱、如是一類執有不可說補特伽羅、復有一類總撫一切法體皆非有、外道執有別眞我性、此等一切見不如理、皆不能免無解脫過

若由一切權我實不有、心既刹那刹那生滅、久遠時所曾更事、今云何

若一切類我體都無、刹那滅心於曾所受久相似境何能憶知、如是憶知從

譯は此後者に意味を取りたるものゝ如し、西藏本又此後者に依らずんば通せず）が諸蘊に於て我所を執ずること著るしく起りて、其（我所執）は此等（如來—稱友）の壞聚見を成ずべし我所見有れば更に「我所愛」を成ずべし。爾れば（異生性の如く—富樓那）我と我所とを愛する甚だ堅固なる繫縛によりて壞亂せられたる彼等（如來）には解脫極遠を成ずべし。「若し我に於て愛着すること一向に起らず」と言はるゝなりと稱せばそは無我に於て我なりと迷ふが故に愛生じ、實我（bDag-Nid）に於ては生せずと言はるゝことに道理す。爾れば或者（犢子部—稱友）は補特伽羅を執し、或者は一初無性なりと執ず、何れもそは此敎に於て過失起れるなり。又凡そ外道にして我は一向に別の實物なりと思惟する所の彼等の如きに於ては此解脫無き過失を免るゝことなし。

今若し我は一切種に於て無くば、諸の刹那の心に於て領納（Nams-su-Myoi）して久しく經過せる對境（Don, artha）を云何にして憶

憶云何更知、從二憶念境界相類無別一、心念及更知生、從二此想類差別心一、無間念得レ生、其相云何、由丁與二於レ彼廻向覺觀一同有相應及想等、無丙依止差別、憂悲散亂等、損乙其勢力甲、何以故、此想類差別心、若同境非二同類一、不三能生二此念一、若同類非二同境一、亦不レ能レ生二此念一、若二同但一刹那、亦不レ能レ生二此念一、若異二此三一、則能生二此念一、若念生必由二此生一、不レ見三餘物於レ念有二功能一故、

二相續內念一、境想類心差別一生、且初憶念爲下從二何等心差別一無間生上、從下有二緣一彼作意相似相屬想等一、不レ爲二依正若別愁憂散亂等緣指壞一功能心差別上起、雖レ有二如レ是作意等緣一、若無二彼類心若別一者則無堪三能修二此憶念一、雖レ有二彼類心差別因一、若無二如レ是緣一、亦無二能修理一、要具二二種一方可二能修一、諸憶念生但由二於此一、不レ見三離レ此有二功能一故、

念（Dran-Pa）し或は認知（Ṅo-Ces）するや。憶念の境に於て想（ḥDu-Çes-Pa）の因より起れる心の差別よりなり。云何なる心の差別よりなるや。何れの後に（mJug-Thogs-Su）憶念を生ずるや。それら（憶念せらるべき處—稱友）に廻向（原文には（Rtag-Pa）とあれども稱友及富樓那婆爾陀那の註釋には、Dran-Par-Bya-Ba De-La BTad-Pa-ni De-La gTad-pa とあるが故に BTad-Pa なるべし）すると、相似（肖像を見るよりして原物を憶念する如き—富樓那婆爾陀那）と相屬（相似せるものの無くとも煙を見るより火を憶念する如き—稱友）と有る想等を具有すると、又所依の差別（病氣の相の如き）苦惱と散亂（異なれる所作に移り動く—稱友）等によりて損傷せられざりし（原文には na-Ñams-Pa と有り、富樓那婆爾陀那には ma-Ñam-Pa;「等しき」とあれども稱友には ma-Ñams-Pa となれり、是正し、舊譯に損其勢力とあるは不損其勢力の不字の脫落、旭雅本訓點の如きは其意味を作さず）

今云何別心所見餘心得憶、何以故、天與心所見祠與心不應得憶、是義不然、不相應故、天與心祠與心此二不相應、非因果故、如一相續心有相應、彼則不爾、我等不說別心所見別心能憶、此云何、從見心有別憶念心生、

如何異心見、後異心能憶、非天授心曾所見境後祠授心有憶念理、此難非理、不相屬故、謂彼二心互不相屬、非如一相續有因果性故、我等不言異心見境異心能憶相續一故、然從過去緣彼境心、引起今時能憶念識、謂如前

力を具有するとより(生ずる)なり。而も尚その因(記憶の境に向へる想の因—稱友)より生じたるにあらざる心の差別によりてはそれ(憶念)を生せしむる能はず。彼の因より起れるものなりとも別の如き(廻向し乃至想等を具有し損傷せられざりし力を具有する等にあらざる—稱友)ものはその記憶を生せしむる能はず。兩者共に(備はる)如くんば(生せしめ)能ふが故に、かくの如くして記憶を成ずべし。他に於てはその功能見られざるが故なり。

今、凡そ異心によりて見て、(後に)異(心)によりて憶念する如き、その如くんば天授(Lha-Byin; devabatta)の心によりて見、而して(後)祠授(mChod Sbyin; yajñadatta)の心によりて憶念すべし。(此難は理)にあらず。(そは)相屬なき故なり。此二は因と果とに於て成ぜられざるが故に、一相續に於て存する因と果との如く相屬なきなり。異心を以て見、而して異心を以て憶念すとも亦言はざるなり。然れども(前に—分別根品に)釋せられた

由二相續變異一故、如二前所說一、若爾有二何失一、從二憶念心一更知心生、

若無、我執能憶、能憶是何義、由レ念能取レ境、此取レ境爲レ異レ念、不レ異二此念一、能作取故、是我前所說、因緣能生二此念一、謂想類差別心、復次是汝所說、及多憶念從二此相續稱名及多一見二憶念生一、說名二憶念一

若無、我此念是誰念、又第六別言是何義、主爲レ義、譬如二人問一、此以レ何說一、相續轉變差別力故生レ念何失、由二此憶念力一、有二後記知生一、

我體既無執爲二能憶一、能憶是何義、由レ念能取レ境、此取レ境豈異レ念、雖レ不レ異レ念但由二作者一、作者卽是前說念因、謂彼類心差別、然世間所レ言制怛羅能憶、此於二蘊相續一、立二制怛羅名一、從二先見心一後憶念起、依二如レ是理一說二彼能憶一、

我體若無是誰之念、爲下依二何義一說中第六聲上、此第六聲依二屬主義一、如何

る如く、「相續變異する形相によりて、見る心より別異なる憶念の心生ず」と言はるゝかくの如き處には何の過失あるべき。又實に憶念によりて認知するなり。

我無くば誰によりて此の如く憶念するや。憶念と言はるゝ義は何ぞ。憶念によりて境を執ずるなり。「それ（憶念）が執ずること」は憶念より別なるものなるや。然らば憶念によりて能作（Byed-Pa）するなり。あるものによりてそれを能作すると云ふことは釋し畢れり、（卽）憶念の因は心の差別なるなり。然らば制怛羅（Nag-Pa; citrā; 人名なり、俱舍光記に正月正月出現、從此星爲名、於此月生故、以此星爲名）によりて憶念すと云はるゝは云何なる如きものなるや。制怛羅と言はるゝ相續より彼（憶念）生ずと見らるゝが故に說くと云ふなり。

我體無くば此憶念は誰の（誰に屬するもの）なるか。此第六（聲）の義は云何なるものなるや。主（Rje-Bo）の義なり。例へば何の（屬

爲レ主、譬如二婆羅門牛一、云何婆羅門爲二此牛主一、由三乘將使等事二屬波羅門一故、若爾此念、於二何處一可レ使、由レ此以レ我爲二彼主一、於二應憶境中一、於レ中何用、使三彼爲一憶境一故、希有樂自在人、作二此言一說、謂使二此爲レ生レ此、云何此可レ使爲レ生、彼名レ使爲レ遣レ彼名レ使、由二念無レ行故、因レ生說レ使、若爾主應レ成二財因一、財應レ成二主果一、何上故、由二因於レ果、果有二增上一、由レ果因有二所得一、是因能生レ念、此念屬二此因一、是故主以レ因爲レ義、諸行聚相續攝二在一處一、主名二天與一、立名二牛主一、此假名人、物屬二何主一、此如三牛等屬二制怛羅一、彼云何爲二牛主一、謂依三彼彼所乘所構所役等中彼得二自在一、欲下於二何所一駈中役於念上、而勤方便尋二求念主一、於二所念境一駈二役於念一、役レ念爲レ何、謂令二念起一、奇哉自在起二無理言一、寧爲三此生而駈二役此一、又我於レ念如何駈役、爲レ令二念起一、爲レ令二念行一、念無レ行故、但應二念起一、則因名レ主、果名二能屬一、由二因增上一令二果得レ生、故因名レ主、果於二生時一是因所有、故名二能屬一、卽生レ念因足レ爲二念主一、何勞立レ我爲二念主耶、諸行聚一類相續、世其施說二制怛羅牛一立二制

する）主は何ものゝ如くなるや。例へば牡牛の（屬する）制怛羅の如し。此は云何にして其（牛の屬する）主なるや。彼（牛）は耕作（Rmo-Ba）と乘騎（bShon-Pa）等に使用せらるゝ處に於て依屬せるなり。憶念は何處に使用せらるゝ時、かくの如く此主を求むるや。憶念せらるべき對境に於てなり。何の爲に使用せらるべきや。憶念せらるべきが爲なり。嗚呼「そのものはその爲に使用せらる」と言はるゝことが、德（ある人）によりて「生ぜしむること」として良く說かれたり。云何に使用せらるべきや。憶念を生ぜしむる門によりてなるや、或は行かしむる（遣る）門によりてなるや。憶念に於ては行くこと可能せられざるが故に生ぜしむる門によりてなり。爾れば唯因は主にして果は唯隷屬せるものたり。かくの如く因は果の爲に力を作し、又その果を具有するもの因なるが故に、其（果）は憶念の因なる所のものゝみの（に屬する）なり。凡そ制怛羅と言はるゝは行の聚の相續に於て一として

於二餘處牛（生？）變異生中一、思量爲二因緣一故、說名二牛主一、於中無三一人名二天與一、無二一物名一牛、是故於中若離二因義一、不可二立爲一主、何物能識、此識是誰識、應二如念釋一、此識因緣、謂根塵覺觀思惟、如理應知、是此差別、

若有人說二我有一、由三有觀二有者一故、一切有等事必定觀二有者等一、譬如三天與行、此中有事名行、必定觀二行者一天與識事亦爾、是物能識、此識必應依彼生一、應問二此人一、汝所說天與是何物、若說我爲二天與一、此我於前但羅一名爲二牛王一、是牛相續於二異方生變異生一因、故名爲主、此中無二一實制但羅一、亦無二實牛一、但假施設故言二牛主一、亦不離因、憶念既爾、記知亦然如辯二憶知一熟爲二能了一、誰之識等亦應二例釋一、且識因緣與前別者、謂根境等、如應當知、

有作二是言一、決定有我、事用必待二事用者一故、謂諸事用待二事用者一、如三天授行必待二天授一、行是事用、天授名者、如是識等所有事用、必待二所依能了等者一、今應詰彼、天授謂何、若是實我此如二先破一、若假士夫體非二一

執せられて、牛と言はるゝものゝ主と名けられたるものなるが、彼尙、餘處に於て又變異起る時に、因の有體として有るを思惟によりて主なりと說かれたり。而も獨り制但羅と言はるゝものは都て無く、牛と云はるゝものも亦無きなり。爾れば又其處に因の有體に係はらざる主の有體は無し。誰かの識は誰かの識なりと言はるゝその如き等も亦此の如く說かるべし、その因は理の如く根と境と作意等なりと言はるゝ此は差別（因の種類）なり。

【對數論】

「凡て所作（Bya-Ba）は作者（Byed-Pa-Po）に觀待するが故に、一切の所作は作者に觀待す、例へば天授行くと言はるゝ此處に、行かるゝこと（hGro-Bar-Bya-Ba）は行く者（hGro-Ba-Po）・天授に觀待する如く、その如く識は所作なり。此の故に（その者によりて）識る所のもの（識者）も亦必要なり」と言へる其處に、天授と言はるゝものは何なるや說かるべきなり。若し我なりと言はゞ、それこそ證明せ

已破、不レ可二成立一、若汝說、世流布所顯、此人不レ成二一物一、諸行聚得二如レ此名一、此中如レ說二天與行一、說二天與識一亦爾、

云何說二天與行一、諸行刹那刹那生滅、相應無二別異一說名二天與一、諸凡夫執レ彼許爲二一衆生一、彼於二別處一作二自相續因一、世間於レ彼說二天與行一、於二餘處一生說名レ行、譬如下光聲相續於二別處一生說名上行、是彼正作二識因一、說名二天與識一、聖人由二世流布所レ立、亦說二彼事一、爲下與二言說一相應上故、

於二經中一說識識レ境、此物一、於二諸行相續一假立二此名一故、加二天授能行一識能了亦爾

依二何理一說二天授能行一、謂於二刹那生滅諸行不異相續一立天授名一、愚夫於レ中執爲二一體一、爲二自相續異處生因一、異處生名レ行、因卽名二行者一、依二此理一說二天授能行一、如二焰及聲異處相續一、世依レ此說二焰聲能行一、如レ是天授身能爲二識因一故、世間亦謂二天授能了一、然諸聖者爲レ順二世間言說理一故、亦作二是說一、

經說、諸識能了二所緣一、

らるべきものなり。若し言說によりて施設せらるべき士夫（Skyes-Bu）なりと言はゞ、そのものは一物としては都て無くして、それらの行（hDu-Byed）に於て名その如くなりと言はるべきなり。そこに天授行く如く（天授によりて）識る（と云ふこと成就せらる）。

天授は如何に行くや、「刹那に滅し相續異らざる諸行に於て、諸童蒙によりて一なる體性を執じて天授なりと思度せなれたる諸のもの」が、自の相續異境に起るについて因となれる時、天授行くと言はるゝなり。異境に起ることは行くことなり、火（原文に Med とあるは Me の誤）と聲の相續に於て行くと言はるゝ如し。それらの同じきもの（刹那滅の諸行を童蒙が天授なりと度れるもの）識の因になれる時、天授によりて識るとも言はるゝなり。諸聖者によりても亦、言說の施設せらるべき爲に、それらに於て名その如くなりと說かれたり。

爾らば經中に、識によりて識ると說かれた

中識何所作、悉無二所作一、如下識果隨似レ因、悉無二所作一、但由レ得二相似體一故說上如レ此、說二識識レ境亦爾、悉無二所作一但由レ得二相似體一、

識相似有二何義一、體生似レ彼、是故此識雖二從レ根生一、但說レ識レ塵、不レ說レ識レ根、復次此中識相續由下於二後識一是因上故、說二識識レ境、此言無レ失、由下於二因中一立中作者名上故、譬如レ說二鈴正鳴一、復次譬如二燈行一、識識レ境亦爾

云何燈行、於二光相續一假名說レ燈、此相續正生二於餘處一說三燈行二餘處一、如レ此於二心相續一、假名說識於二所緣一爲二何所作一、都無二所作一、但似レ境生、如二果酬レ因雖レ無二所作一而似レ因起說名二酬因一、如是識生雖レ無二所作一而似レ境故說名レ了レ境

如何似レ境、謂帶二彼相一、是故諸識雖二亦託レ根生一、不レ名レ了レ根、但名爲レ了レ境、或識於レ境相續生時、前識爲レ因引二後識一故、說二識能了一亦無レ有レ失、世間於レ因說二作者一故、如三世間說二鐘鼓能鳴一、或如二燈能行一、識能了亦爾、

爲下依二何理一說中燈能行上、焰相續中假立二燈號一、燈同異處相續生時、說爲二燈行一、無二別行者一、如レ

る其處に於て、識は何を作すや。瑣少も亦作さず。例へば果は何ものをも作さずと雖も而も(因と)似て(果の)自體を得るが故に因と等しく作すと言はるゝ如く、その如く識も亦何ものをも作さずと雖も、似て自體を得るが故に境を識ると言はるゝなり。

此(識)の似るとは云何、彼の(境の青等の)形相 (Rnam-Pa) なり。その故にそは(識は)根によりて生ぜられたりと雖も境を識ると言はれ、根(を識ると言はるゝ)にあらず。或は其處に識の相續は(他の)識の因になれる故に、識によりて識ると說かれたること過失なし。因に於て作者の聲なりと說かれたるが故に、鈴によりて鳴らすと言はるゝ如し。又燈行く如く、識によりて識ると言はるゝも亦それと同じ。

燈は云何に行くや、燈と言はるゝは諸焰の相續に於て施設し、彼(相續)他境に於て起るとき彼々の境に行くと云はるゝなり。その如く識と言はるゝは心の相續に於て施設し、彼

識、此心相續於二餘塵中一生レ識、此識二彼塵一

復次譬如二世間說一、色有色生色住、此中能有等不レ異二有等一、亦有二二言一、於レ識二言亦爾、

若從レ識識生、不二從レ我生一、云何生不二恒似レ本、又不下由二決定次第一生上譬如二芽節葉等一、

(1)由二住異諸行相一故、一切有爲法性、皆如レ此必定、相續不レ同、若不レ爾、入如意得定、觀人身心、相似生故、一切相續、與二初刹那一不レ異故、後時不レ應二自然出一定、

是心相續假立二識名一、於二異境一生時說名二能了一、

或如二色有色生色住一、此中無二別有生住者一、說二識能了一理亦應レ然、

若後識生從レ識非レ我、何緣從識不二恒似レ前、及不三定次生如二芽莖葉等一、

(1)有爲皆有二住異一故、謂有爲自性法爾、微細相續後必異レ前、若異レ此者縱レ意入レ定、身心相續相似而生、後念與レ初無二差別一故、不レ應二最後念自然從レ定出一、

(相續)他境に生ずる時彼々の境を識ると言はるゝなり。

或は色生成す(ḥGyur-Ba)、生ず、住すと言はるゝ此中に於て、生成者と生成(の所作)とは別物にあらざる如く、識に於ても亦それと同じかるべし(識の識者は識の所作より別異なる物にあらず=稱友)。

若し識より識生ず、我よりにあらざるならば(識の相性の因に差別なるが故に=稱友)何故に(1)常に彼(識)と似てのみ生ぜざるや、(2)又芽と莖と葉等の如く次第決定して生ぜざるや。

(1)住(gNas-Pa)變異(gShan-Du-ḥGur-Ba)するは有爲(ḥDus-Byas)の相性なるが故に、相續常に變異することは一切の有爲の自性(Raṅ-bShin)なり。爾らずんば諸の等持(bSam-gTam; samādhi)成就して平等に住せる(mNam-Par-bShag-Pa; Samāhita)ものに、身と心と等しく生ずる時、初の刹那と差別なきが故に後になりても(他によりて求め

(2)亦有二決定次第心生一、若心應下從二此心一生上、從レ此彼必定生故、亦有二別心一、同相有二功能一生二同相心一、由二性差別一故、譬如下從二女人心一次第若穢二汗身一心生、或此夫及子等心生上、復於二後時一、由二相續變異一故、更生二女人心一、此心於下穢二汗身一心生中上、或於二此夫及子等心生中一有二功能一、由二同性一故、若異レ此則無二功能一、復次從二此女人心一、由二別因緣一、生二無量別心一、於二此衆心中一、若心多生、明了生、最近生、從二此心次第一先生、是彼修習力最強

(2)諸心相續亦有二定次一、若此心次彼心應レ生、於二此心後一彼必生故、亦有二少分行相等心一方能相生、種性別故、如丙女心無間起下嚴二汗身一心上、或起乙彼夫彼子心等甲、後時從二此諸心相續、轉變差別一還生二女心一、如レ是女心於二後所レ起嚴汗心等一、有二生功能一、異レ此無二功能一、由二種性別一故、女心無間容レ起二多心一、然多心中若先數起、明了近起、先起非レ餘、由二如是心修力強一故、唯除二將レ起位身外緣差別一、

られずして＝稱友）自ら定より）出立せざるべし。

(2)凡そ生ずべき所のものよりのみ彼生ずるが故に、諸衆生の次第も亦正に決定す、種性の差別（Rigs Kyi Bya-Brag）によるが故に、形相等しき心の或るものは、或る心を生せしむるに功能（Nus-Pa）あるものなり。例へば女の心に從つて（無間に）、若し彼女の身を汚穢する（ことを緣ずる心＝稱友）、又は彼女の夫或は男兒等（を緣ずる）の心生じ、又後に相續（Rgyud）轉變（yoṅs-Su-ḥGur-Ba）することより女の心生ずるならば、其（後に生せし女心＝稱友）は彼女の身を汚穢する心を生せしむることに、又は彼女の夫或は男兒等の心を生せしむるに功能あるものなり。（それは）それの（彼女の身を汚穢する心或は彼女の夫又は男兒等の心の＝稱友）種性ある物（Rigs-Can Yin-Pa-Ñid）なるが故なり。（これに）異りては功能あるにあらず。又女の心より次第（Rnam-Grans, Paryāya）によりて多種の心

故、除二現時身外因緣差別一、

此心修習力强、云何不二恒受一果、由三此心有二住異相一故、此住異相、於二別修習果生中一、隨二順功德一故、

此法相於二一切心種類中一、是方無間因智中、諸有二修力最强盛一者、寧不三恒時生二於自果一、由三此心有二住異相一故、此住異相於二別修果相續生中一最隨順故

諸心品類次第相生因緣方隅我已略說、委悉了達生ぜらるならんには、それより（その女の心に從つて生ぜられたる心の中にて＝稱友）（相續によりては）より多きと、（功能によりては）より明了なると、（生ぜしめらるべき心と）より近きとの生なる所のものゝみ生ずべし、それの修習（dGos-Pa とあれども樓那婆爾陀耶釋論には Sgos;bSgos 等とあり、漢譯二本に修習とあるより見れば bSgoms-Pa; bhāvanā ならん）力を具するが故なり。その（時に）調へられたる（ḥDus-Pa; 富樓那婆爾陀那が Ñes-Bar-gNas-Pa と云ふ、「玄奘の所謂將起位」なり）身と外の緣の差別には係はらず。

その修習こそ强き力を具するならば、何故に常に果を發せざるや。住（より）變異する性質は有爲の相なるが故に、又その變異は他の修習の果生ずるに隨順（合理（Rjes-Su-mThun-Pa）するが故なり。

此は一切の心の種類に於ける（我が）方隅（建言・命題；Phogs, Paksa）として盡せる所

佛世尊有二自在一、此中說偈

於二孔雀一尾一
具二一切相因一
餘人不レ能レ知
此智是佛力

何況無色諸心差別、我等能知、

有二餘外道執一、從レ我心生、此二難於二彼外道一最明了成、云何心不三恒生二同一相一、云何不三決定次第生、譬如二芽節葉等一、

唯在二世尊一、一切法中智自在故、依二如レ是義一、故有頌言、

於二一孔雀輪
一切種因相一
非二餘智境界一
唯一切智知

色差別因尙爲レ難レ了、況心心所諸無色法、因緣差別可レ易二了知一、

一類外道作二如レ是執一、諸心生時皆從二於我一、前之二難於レ彼最切、若諸心生皆從レ我者何緣後識不二恒似レ前及不三定次生如二芽莖葉等一

なれども、無間の因を知ること (mJug-Thogs Kyi Rgyu Ĉes-Pa) に於て佛は自在主 (mNaḥ-bDag) なり。かくの如く(上座羅睺羅 gNas-bRtan Sgra-gCan-Zin; sthavira Rahura にゝりて＝稱友)

一の孔雀の輪に於てと雖ども
一切の因の相は
一切智 (Kun-mKhyen) に非ざるものに
よりては知らるべきにあらず

それを知るは一切智の力なり

と言はるゝ時、色有るにあらざる (gZugs-Can Ma-Yin-Pa) 心の諸差別の如き、說かるゝ何の必要ぞ。

【對勝論】

「何故にそれと似てのみ生ぜざるや、又芽と莖と葉等の如く次第決定して生ぜざるや」と言はるゝ此は、心は我より生ずと考ふる所の外道 (Mu-Stegs-Can) に於てこそ明に難 (Klan-Ka) たるべし。

若汝執、由㆑觀二心和合差別一故異、是義不㆑然、由三別和合不二成就一故、由三二和合物有二定量一故、彼說二和合相一者、非至爲㆑先後至說名二和合一、由二彼所執和合相一、則應㆑立三我有二定量一、徧義則不㆑成、是故由二心有㆑行、亦應㆑說三我有二行及滅一、若汝執、由下於二一分一和合上、是義不㆑然、此一物無㆑分故、我亦許三汝有二和合一、雖㆑然若心恒不㆑異、云何和合有二差別一、

若謂下由㆑待二意合差別一有中異識生一、理定不㆑然、我與㆑餘合非二極成一故、又二物合有二分限一故、謂彼自類釋二合相言、非至爲㆑先後至名㆑合、我與㆑意合應㆑有二分限一、意移轉故我應二移轉一、或應二與㆑意俱有二壞滅一、若謂二一分合一、理定不㆑然、於二一我體中一無二別分一故、設許㆑有㆑合我體既常、意無二別異一、合寧有㆑別、

若し意と合する（Phrad-Pā）（と云ふ）特異なること（Bye-Brag; viçeṣa 分別）に觀待するが故にと云はゞ非なり、合は別にあらざるが故なり（註）。合する事有るもの等は定限せられたる（Yoṅs-Su-Chad-pa）（と見らるゝが）故に、又合と言はるゝ相は、未だ合せざること（Ma-Phlad-Pa）が先行すること有るものゝ合なりと釋せらるゝが故に、我は定限せられたるとの論結となるべし。その故に意移動せる所には、我移動し或は壞損せられたるの論結となるべし。若し一方合すと言はゞ非なり。その方分はその同じきもの（我）の（に屬する）有性なりとは適當せられざるが故なり、合有りと認許せらるゝ雖も而も常に差別なき意に於て云何にして合差別すべき。

（註）玄奘譯に「我與㆑餘合非二極成一故」と言ふ、成唯識論卷一、三左に數論勝論の我を示して「我體常周遍量同虛空」と言ひ、十句義論にも「極大者謂空時方我實和合一實極大乃至遍行」とあるから、今の玄奘譯の一句は、普遍的な意味ある我に局分的な合と云ふ觀念を加へることの妥當でないことを言つたものと解すべきであらう。然るに眞諦譯及西藏譯は此玄奘譯とは異れる意味なるものゝ如く、そは次に示す稱友及富樓那波爾陀那の註釋によりて明かにせらる。蓋し該二註釋の意味は云何にしても玄奘譯のそれと同義なりとは解せられない。

1)Brel-Ba gShan Ma-Yin-Paḥi-Phyir-Ro. Shes-Bya-Ba Ni De-Ni De-Lta Ma-Yin-No. Ciḥi-Phyir She-Na,

bDag Daṅ Yid De-Dag Las ḥBrel-Ba gShan-Du Ma-Grub-Paḥi-Phyir Te, Kho-Bo-Cag La Ni ḥBrel-Ba Shes-Bya-Baḥi dNos-Po(gCig-Pu)Grub-Ba Ni ḥGaḥ Yaṅ Me-Do I (bSan-ḥGyur B. 66 399b; B.68 383 a)

「合別にはあらざるが故に」と言はるゝは、そはその如くにあらず。何故ぞや、その我と意との二より合別なりとしては成就せられざるが故なり。我等に於ては合と言はるゝ（一の）有體成就せらるゝこと都て無し。

即西藏譯及眞諦譯は、勝論が我と意との他に「合」なる物の實在を説く點に對して述べたるものと解せらる。

若汝説下由レ觀三智有二差別一、是故心有中差別上、是義不レ然、智與レ心同難故、我既無二差別一、智云何有二差別一、若汝執下觀二功用差別一、從二我和合一智差別生上、是義不レ然、云何不レ執、但從二功用差別一相應心智差別生、何以故、此中無レ有二我功能一、隨レ一可レ知レ得故、譬如レ藥事成時有二誑惑醫一説中部莎訶言上、若汝説下由二我有一此二得レ成、此執但有二語言一、若汝言、此我是彼依止、若爾於レ中何者是所依、何者是能

若待二別覺一、爲レ難亦同、謂覺因レ何得レ有二差別一、若待二行別一我意合者、則應下但心待二行差別一能生中異識上、何用レ我爲、我於二識生一都無レ有レ用、而言二諸識皆從レ我一、如下藥事成能除二痼痾一、誑醫矯説中普莎訶言上、若謂二此二由レ我故有一、此但有レ言無二理爲レ證、若謂三此二我爲二所依一、如下誰與レ誰爲二所依一義上、非下心與レ行如レ畫如レ果我爲二能持一如レ壁如レ器、如レ是便有二更相礙失一及有二或時別住失一故

若し覺（Bro）の差別に待すと言はゞ云何にして覺の差別なるやと此同じき處に於て難を求めしむ（何故に常にそれと似てのみ生せざるやと云ふべし＝富）。若し行（ḥDu-Byed）の差別に待する我と意との合によりてなりと言はゞ、行の差別に待する心のみによりて充全にして、我の功能は何等も亦緣せられず、藥によりて果成就せられたるに、狡猾なる惡醫によりて普莎訶（Phu-Svaḥa-hḥa）と言はれたる如し。若し我有るときはその二（心と行）有る（故にその故に我有り＝稱友）と言はゞ、（此に言はれたるは）全く語のみ。若しそは（我は、その二の）所依なりと言はゞ、例へば何もの丶所依は何もの丶如くなるや（と所依の體の比喩を求むるに＝稱友）その二（行と心）は、畫と杜松の果（Rgya-ʃugs; vadara; 婆陀羅

依、何以故、此二非二所持一、譬如二畫色及婆陀羅子一、亦非二能持一、譬如二壁及瓶一、由レ有二相礙一、俱有二二過失一故、

若我爲二彼依止一不レ如レ此、若不レ爾云何如二地大是香等依止一、我今大喜二此譬一、乃證二我義一、謂我無如下離二香等一別地大不レ可レ得、於二香等一假名說中地大上、如レ此於二切用及心一無レ有二別我一、但於二此二假名說一我、何人能決三了有二地異一於二香等一、汝今應レ知、譬如レ無四自在人有三第二頭、異二色等五塵一、

若離二香等一無二別地一、云何說三於レ地有二四德一、非下如二壁器一此爲中所依上、若爾云何、此但如三地能爲二香等四物所依一、彼如レ是言證二成無我一故、我於レ此深生二喜慰一、如三世間地不レ離二香等一、我亦應レ爾、非レ離二心行一、誰能了三地離二於香等一、但於二香等聚集差別一、世俗流布立以二地名一、我亦應レ然、但於二心等諸蘊差別一、假二立我名一、

若離二香等一無二別有レ地、如何說言三地有二香等一、

子）との如く能依にあらず、そは又壁と樽（器）との如く所依として（壁に畫が又樽に果が能依る等の如く＝稱友）適當せるにあらず、障碍すると（境）差異せるとの過失となるべきが故なり。

若し「其（我）はその如く所依にあらず、爾らば云何なる如しと言ふや、例へば香（Dri）等の（香等より）地（Sa）の（別にあらざる）如く覺等よりも亦我は別にあらず）」と云ふならば、これこそ余の無我と云はるゝを信ぜしむるものなるが故に、余は滿足せしめられたり、例へば香等より地は別にあらざる如し。香等より地別なりと確執する者は何誰なるや。

（註）此處の西藏文は漢譯二本に對するに簡にして文章に脫落あるやの疑なきにもあらざれど、稱友・富樓那波爾陀那の釋論にも漢譯に見ゆる如き文に對する註釋無きを以て略疑ふの餘地ならん。

若し香等より地別にあらざれば、「地の香等」と云はるゝ言說（Tha-Sñad）は云何。「そ

爲二各分別一、彼令下他得レ知丙香等得二地等名一無乙別地等甲、譬如レ說二木像身形、

雖レ然若由下觀二功用差別一故、智有中差別上、云何不三一時生二一切智一、若功用最强、是功用遮二餘功用一、若爾是最强功用、云何不二恒生一レ果、是彼道理、卽是彼修分別、我則無二復用一、

必定應レ信二受有レ我、念等由二求那性一故、此求那必定依二止物一故、是故念依レ我、是我德若執下彼依二止餘物一、則不二相應一、離レ我餘物無レ覺故上、是義不レ然、彼求那性不二成就一爲レ顯三地體有二香等別一故、卽於レ地說レ有二香等一、令三他了達是此非レ餘、如三世細言二木像身等、

又若有レ我待二行差別一、何不三俱時生二一切智一、若時此行功用最强、此能遮レ餘令レ不レ生レ果、寧從强者果不二恒生一、答此如二前修力道理一、許二行非レ常漸變異一故、若爾計我則爲二唐捐一、行力令二心差別生一故、彼行此修體無レ異故、

必定應レ信二我體實有一、以レ有二念等德同義一故、德必依二止實句義一故、念等依レ餘理不レ成故、此證非レ理不二極成一故、謂說二念等德句義攝一、體皆非レ實、義不二極成一、許下有一別體一れら香等こそ地なりと言はれ、他にはあらず」と言はるゝことを知るべきによりてなり。(水等に)區別せらるべきが故に、木像の身と言はるゝ如し。

行の差別に待ずと雖も而も(我々意と合す)何故に一切智一時に生ぜざるべき。(行の差別にして)力大なるもの他に障碍を作す。(論主曰)その力大なるものこそ何故に常に果を發生せざる。此(行)の形相(を壞し或は障碍するもの＝稱友)は(先に釋せられたる)修習なる故に、我を計度することは意味無し。

若し「我は必定して認許せらるべし、念(Dran-Pa)等は德(Yon-Tan; guṇa 求那)の有體(dÑos-Po=Thsig-Gi Don; padārtha 句義)なるが故に、又(句義)は必定して實(Rdsas; dravya)に能依するものなるが故なり。それら(念等)の所依別なりとは更に可能せらるるが故なり(爾れば此等の所依は我にして、

故、是汝所立、念等是求那性、於我不成就、我等執一切所有皆名陀蠟脾、由經言、沙門果者唯有六物、是故彼依止陀蠟脾爲性不成、何以故、是依止義、前已簡擇、不成就故、是故此言但是漫說、

若我實無、造業何用、我當受樂、我當受苦、爲此故造業、我是何物、我計執境界、我計執何法爲境界、諸聚爲境界、汝云何知、由於彼生愛故、與白黑等智、同依止故、如說我自我黑我肥我瘦我老我少等、見此計執我、與白黑等智悉同中

皆名實故經、說六實句、名沙門果、故、彼依實我、理亦不成、依義如前已遮遣、故、由此所立但有虛言、

若我實無爲何造業、爲我當受苦樂果、故、我體是何、謂我執境、何名我執境、謂諸蘊相續、云何知然、貪愛彼、故、與白等覺、同處起故、謂世有言、我白我黑我老我少我瘦我肥、現見世間、緣白等覺、與計我執、同處而生、非所計我有此

我は有り＝稱友）と言はゞ非なり。確定せられざるが故なり。此等は德の句義なりと成就せられず。吾等の見解に於ては一切の（相によりて）有るものは實（Rdsas: dravya; 陀羅脾）にして、「沙門たる位置の果（dGe-Spyoṅ Gi Tshur Gyi ḥBras-Bu; Çrāmaṇyaphala）は六實なり」と（經に）出るが故なり。それら（念等）は實に能依するものなりとも亦成就せられず、所依の義は既に吟味し畢れり。爾れば此は漫なり。

我無くば何の爲に業を造るや。我樂になれ、我苦にならざれと言はるゝその爲なり。又我と言はるゝは何ものなるや、此我執（bDag-Tu-ḥDsin-Pa）の境なるものなり。此我執の境は何ものなるや。境は蘊なり。云何にして知るや、それら（蘊）を貪愛するが故に、又白等の覺と處（gShi）を等しくするが故に、我は白、我は蒼、我は肥、我は瘦、我は老、我は若少と言いて、此我執は白等の覺と處を等しくすと見らるゝなり。（汝は）それらの種類

依止、汝不レ許三於レ我有二如レ此等差別一、是故此我計執、但約レ陰起、

於レ我有レ思故、於レ身假レ名說レ我、譬如二世言一、彼臣卽是我、此於レ我有レ思、假立二我言一、我計執則不レ爾、若但緣レ身爲二境界一、云何不下緣二他身一爲中境界一、是義不レ然、不二相應一故、此我計執、隨二所有法其相應或身或心一、於レ中起二我計執一、非二於餘處一、於二無始生死一所二數習一故、何者爲二相應一、謂因果道理、

若無レ我此我計執、是誰計執、又第六別言是何義、此問已去、今復更來、答亦如レ此、乃至若法是此計差別一、故知我執但緣二諸蘊一、

以三身於レ我有二防護恩一故、亦於レ身假說爲レ我、如レ言二臣等卽是我身一、於二有恩中一實假二說我一、而諸我執所取不レ然、若許三緣レ身亦起二我執一、寧無下我執緣二他身一起上、他與二我執一不二相屬一故、謂若身若心與二我執一相屬、此我執起緣レ彼非レ餘、無始時來、如レ是習故、相屬謂レ何、謂因果性、

若無二我體一誰之我執、此前已釋、寧復重來、謂我於、前已作二是說一、爲下依二何義一說中第六聲上、乃

は我の（に屬するもの）なりとは稱せず。爾れば此は諸蘊を執ずと知らるゝなり。

我を利益する身に於て又我を假設す、例へば我なる所のものこそ此我の臣なりと言はるゝ如し、利益する處に於て我を假設するなるも而も我執にはあらず。身を緣ずるならば何故に他の身を緣ずるにあらざるや。相屬（hBrel-Pa; 關係）なきが故なり。此は身又は心何れと俱時に相屬するともその處に於てのみ此我執は起る、而も他に於てにはあらず。無始の輪廻以來その如く修習するが故なり。相屬とは又何ものなるや。因果の有體の相續なり。

若し我無くば我執は誰の（に屬する）なるや、此は「第六の義は云何なるものなるやと言はるゝことより、そは憶念の因なる所のものゝみの（に屬する）なりと云はるゝに至るま

執屬二此法一、若爾何法爲二計執因一、昔我計執所二熏習一、緣二自相續一爲二境界一、有二垢穢心一、

若無レ我誰受レ苦誰受レ樂、是依止中或苦生或樂生、譬如二樹有一華林有レ菓、此苦樂以二何法一爲二依止一、內六入隨一、如二前所說一、應レ知如レ此、

若執二我無一、誰造二作業一、誰受二用果一、造作及受用、此言有二何義一、先未レ有レ能令レ有名レ作、正得二先業果一名二受用一、此言說別名、非レ顯二別義一、解二判法相一師說、於レ事有二自在一名二作者一、見下世間有レ

至辯三因爲二果所屬一、若爾我執以レ何爲レ因、謂無始來我執熏習、緣二自相續一有二垢染心一、

我體若無誰有二苦樂一、若依二於此一有二苦樂生一、卽說名爲三此有二苦樂一、如二林有レ果及樹有レ花、苦樂依レ何、謂內六處、隨二其所起一說爲二彼依一、

若我實無、誰能作レ業、誰能受レ果、作受何義、作謂能作、受謂受者、此但易レ名、未レ顯二其義一、辯二法相一者釋二此相一言、能自在爲名爲二作者一、能領二業果一得二受者名一、現見二世間一於二此事業一若得二自在一名

で」のその同じきもの起れるなり。此因は何ものなるや。以前に我執によりて熏習（Yoṅs-Su-bSgos-Pa）せられたる、自の相續を境とせる無明（Ma-Rig-Pa; 不明）を具する心なり。

我無くば樂しみ又は苦しむは誰なるや。その所依に於て樂又は苦起る、例へば樹（に）花の萠え出でたる、林（に）果の成れると言はるゝ如きものなり。この二（苦・樂）の所依は何なるや、六處なり。（所依は眼等なりと言いて六處の所依の＝稱友）云何なる如きなるかは既に說き畢れり。

我無くば業の作者（Byed-Pa-Po）は誰なるや、諸果の食者（Za-Ba-Po）は誰なるや。作者と言はれ或は食者と言はるゝ語の義は云何、作すによりて作者にして食するによりて食者なり。同義語（Rnam-Grans; Paryāya）說き盡されたりと雖も義（は說かれたる）にあらず。諸相を辯ずるもの、作者の相自在有るものを作者なりと言ひ、世間に於て或る果に

人、於二餘事中一有中自在能上、譬如三天與於二住食行等事中一、

汝今說二何法一爲二天與一、若汝說我爲名二天與一、我前已破、此不成有、若說二五陰一是作者、則無二自在一、業有二三種一、謂身口意、此中於二身業一者、是身爲二作事一、必繫屬心、是心事於身亦繫屬、自因緣心於二自事一亦爾、是故隨一無二自在一、一切有法、皆繫屬因緣一故、生起悉無二自在一、汝法中是所執我、若不觀二餘因緣一、不三許爲二作者一故、是故此自在不成、由無二此相一、是故隨立一爲二作者一、皆不得成、

爲二能作一、如八見下天授於二浴食行一得中自在上故、名地浴等者、天

此中汝等說二何天授一、若說二實我一喻不二極成一、說蘊便非二自在作者一、業有三三種一、謂身語意、且起三身業一必依二身心一、身心各依二自因緣一轉、因緣展轉依二自因緣一、於中無二一自在起者一、一切有爲屬二因緣一故、汝所執我不待二因緣一亦無二所作一、故非二自在一、由此彼說三能自在爲名二作者相一、求不可得、

於て自在有る如き或るもの見られ、或は見らる、浴と食と行くこと等に於ける天授（Lhas-Byin）の如し。

汝、天授（によりて）は何ものが喩へらるゝや。若し我なりと云はゞ、それこそ證明せらるべきものなり。若し蘊なりと言はゞ、それこそ作者なり。此業は三種にして、身と語と意との業なり。その中且く身と語とは、身と語との業に於て心の他の力によりて轉ず（活動す）。心も亦身と語とに於て、自の因の他の力によりて轉ず。其（心の自らの因）は又それと等しきが故に（他の因の力によりて轉ずるが故に、身或は語或は心或は他の因の＝稱友）何處に於ても尙自在無し。一切の有體は緣の他の力によりて轉ず。我も亦待すること無くしては（覺の差別を生ずる＝稱友）因の體なりと認許せられざるが故に、自在有るものとして成就せられず。爾ればその如き相の作者は都て緣せられず。

於二事中一若因由二功能勝一、假名說爲二作者一、於二餘事一不レ見三我有二一切能故、不レ可レ立三我爲二作者一、何以故、意欲從二憶念一生、覺觀從二意欲一生、功用從二覺觀一生、風從二功用一生、從レ風起レ業、於レ中我作何功能、受二用果一何相、若我正用二此事一、說レ我爲二受者一、是受用果相、此言何義、若汝說二覺知一爲レ受、是義不レ然、我於二覺知一無二功能一、由三已破二於レ識功能一故、

若我無、云何不下以レ非三衆生爲二依止一所有善惡業生長上、非二受等依止一

然於二諸法生因緣中一、若有二勝用一假名二作者一、非二所執我見一有二少用一故、定不レ應三名爲二作者一、能生二身業一勝因者何、謂從二憶念一引二生樂欲一、樂欲生二尋伺一、尋伺生二勤勇一勤勇生レ風、風起二身業一、汝所執我此中何用、故於二身業一我非二作者一、語意業起類レ此應レ思、我復云何能領二業果一、若謂三於レ果我能了別一、此定不レ然、我於二了別一都無二有用一、於乙前分下別生レ識因一中甲已遮遣故、

若實無レ我、如何不下依二諸非情處一罪福生長上、彼非二受等所依止一故、唯內

凡そ或ものゝ因の最勝なるものはそのものゝ作者なりと言はるゝ時、我は何處に於ても更に因なりと見られず。爾れば其(我)はかくの如く作者なるに不適當なり（因の最勝なるものゝ體たるに不相應なり)。憶念（Dran-Pa）より樂欲（hDun-Pa）生ず、樂欲より尋伺（Rtog-Pa）生ず、尋伺よりは勤勇（Rab-Tu-hBad-Ba）なり、勤勇より風(Rlun)なり、それより業起る時、此處に我は何を作すや。又果に於て何處にも我無くば食者に於て計度せられたる享受することは何なるや。若し（果に於て）覺知（dMigs-Pa）するなりと言はゞ、覺知する處に我の能力無し。識に於て（その）能力は遮斷せられたるが故なり（行の差別に待する心のみによるものにして我の功能は瑣少も緣ぜられず、藥によりて果成就せられたるに惡醫によりて普沙訶と言へる如し＝稱友）

我無くば何故に有情の所依に非る處に於て、罪（Sdig-Pa）と福德（Bsod-Nams）とは積聚せられざるや。受の所依に非るが故な

故、以何爲依止、六入爲依止非我、此義前已說、

我既無、從已謝滅業、於未來果云何生、若我有、從已謝滅業、於未來果云何生、從能依法非法生、如汝所言、有何能依及所依、此語前已破、是故法非法、無所依止、復次我等不說從已謝滅業、於未來中果報得生、

若爾云何、從業相續對異、勝類果生、譬如種子果、如世間說從種子果生、此果不從已謝滅種子生、非無間生、云何生、從種子相續轉異勝類生、謂芽節葉等六處是彼所依、我非彼依如前已說、

若實無我、業已壞滅、云何復能生未來果、設有實我、業已壞滅、復云何能生未來果、從依止我法非法生、如誰依誰、此前已破、故法非法不應依我、然聖教中、不作是說、從已壞業、未來果生、

若爾從何、從業相續轉變差別、如種生果、如世間說果從種生、然果不從已壞種起、亦非從種無間卽生、若爾從何、從種相續轉變差別、果方得生、謂種次

り。それの所依は六處にして我にあらず、(そは)云何なる如きなるがその如きは既に說き畢れり。

我無くば、云何にして壞し畢れる業より後生に於て果起るや。我有らば又云何にして壞し終れる業より、後生に於て果起るや。それ(我)に依れる法 (Chos) と非法 (Chos-Ma-Yin) とより起る。此語の義は、例へば何れの所依は何ものゝ如くなるやと言ひて答へ畢れり。爾れば法と非法とは無所依のみより起るべし。(而も)吾等も亦壞し畢れる業より後生に於て果起るとは言はず。

爾らば云何に云ふや。相續(が)轉變することの差別(特異)よりす、種子と果との如し。例へば種子より果起ると言はるゝは、壞せる所より起るにもあらず、又無間にのみ起るにもあらず、爾らば云何に言ふや。相續(が)轉變することの差別よりす、芽と莖と葉等花に達する完き次第より起るが如し。彼(果)花よ

次第所生、及華後此果既從華生、云何說爲種子果、由轉轉於華中生果功能、是種子所作故、是最後華功能、若不以種子功能爲先、此華無功能、得生如此等流果、如此從此業說果報生、不異此義、果報不從已謝滅業生、亦非無間生、若爾云何從業相續轉異勝類果生、

此中相續是何法、轉異是何法、勝類是何法、以業爲先後後心生、說名相續、此相續後後異前、說名轉異、於此轉異中、若有轉異無間最能生果、說名勝類、此於餘轉異最勝故、譬如有取生芽莖葉等、花爲最後、方引生果、若爾何言從種生果、由種展轉引起花中生果功能故、作是說、若此花內生果功能、非種爲先所引起者、所生果相應與種別、如是雖言從業生果、而非從彼已壞業生、亦非從業無間生果、但從業相續轉變差別生、

何名相續轉變差別、謂業爲先後色心起、中無間斷名爲相續、卽此相續後後剎那異前前生、名爲轉變、卽此轉變於最後時、有勝功能無間生果、勝餘轉變、故名差別、如有取識正

り後に成就せらるゝならば、何故にその種子の果と言はるべきや。それ（種子）によりて繼續せられ、花に於てそれ（種子）の功能生ぜしめられたるによりてなり。若しそれ（種子の功能）先に行かざるべきならば、等しく生ぜしめらるべき果に於て其（花に於ける生果）の功能あらざるべし。その如く業より果起ると言はるゝは、壞せる業よりも尙起らず、又無間に於てにもあらず。爾らば云何と言ふや、相續（が）轉變することの差別（特異）によりてなり。

相續とは何、轉變とは何、差別とは何なりと言ふや。業先に行きて心後にして起る所のものは相續なり。そのもの（相續）異と異とに於て生ずるは轉變なり。そのもの（轉變）にして無間に果を生ぜしむる功能なる所のものは他の轉變より特異に勝れたる（Khyad-Par Du hPags-Pa）が故に、轉變の差別（特異）なり。そは例へば又有の取（Srid-Pa）を具する

死心於二後有生一有中功能上、雖下以三種種業一爲レ先、若業重最近數習、是三所生功能、此中明了顯現非二餘業一、如二偈言一、

若重近數習
及昔作二諸業一
先先先後熟
於二輪轉一有レ續

命終時一、雖レ帶下衆多感二後有一業所レ引熏習上、而重近起數習所引明了、非二餘、如二有頌言一、

業極重近起
數習先所作
前前前後熟
輪二轉於生死一

此中果報因所レ立、於二果報果中一功能、生二果報一已、卽便謝滅、同類因所レ立、於二等流果中一功能、若有染汚法、對治生時、卽便謝滅、若無染汚法、由二心相續永謝滅一故、此功能滅卽、謂般涅槃時、於二此義中一有二差別一者、異熟因所引、與二異熟果功能一、與二異熟果一已、卽便謝滅、同類內所引、與二等流果功能一、若染汚者、對治起時、卽便謝滅、不染汚者、般涅槃時方永謝滅、以二色心相續爾時永

死（する時）の心の如し。種々の種類の業先に行く性質のものなれども而も、重（Lci-Ba）或は近（Ñe-Ba）或は數習（Goms-Pa）なる所の業によりて作されたる功能によりて明了に作し、餘のものによりてにはあらず、凡そ（gNas-bRtan Sgra-gCan-Zin; rahura）により て＝稱友）

業の輪廻は種と
近と數習と
先に作されたる所のものより
先に先に異熟すべし

と釋せられたる如し。

其處に異熟（Rnam-Par-Smiu-Pa）の因によりて異熟の果生ぜしめらるべき功能は、異熟を生ぜしめて止滅す。同類因（Skal-Pa Mñam-Paḥi-Rgyu）によりて等しき果（mThun-Paḥi-hBras-Bu; 等流果）生ぜしめらるべき功能は、諸の煩惱有るものによりて對治生ぜられたる時に止滅す、諸の煩惱有るに非るものによりて、心の相續永く止滅す、般涅槃

復次云何從二果報一、別果敎不二更生一、譬如下從二種子果一更生中種子果上、此中一切所立義、與二譬義一不二必悉同一、此中不三從レ果更生二別果一、若爾云何生、從二濕脹轉異勝類一所レ生、此中四大種類、能生二芽等一、是果種子非レ餘、復次是前相續、由レ當レ有レ名說爲二種子一、以二相似一故、此中亦爾、從二此果報一、聽二聞正邪二法等一、因緣差別所レ生、或有漏善、或不善心、轉異若生、從レ此更生二別果報一、不レ由二別理一故、此譬與二立義一同、復次由二此譬一、更滅一故、

何緣異熟果不レ能レ招二異熟一、如下從二種果一有中別果生上、且非二譬喩是法皆等一、然從二種果一無二別果生一、若爾從レ何生二於後果一、從二後熟變差別一所レ生、謂於二後時一、卽前種果遇二水土等諸熟變緣一、便能引二生熟變差別一、正生レ芽位、方得二種名一、未二熟變一時從二當名一說、或似レ種故世說爲レ種、此亦如レ是、卽前異熟遇下聞二正邪一等諸起二善惡一緣上、便能引二生諸善有漏及諸不善有異熟心一、從レ此引二生相續轉變一、展轉能引二轉變差別一、從二此差別一後異熟生、

(Yoṅs-Su Mya-Ñan-Las-ḥDas-Pa) する時に於てなり。

又何故に種子の果の如く異熟より他の異熟生ぜずと言ふや。且く一切は譬喩と等しきにあらず。其處に果のみより他の果生ずるにあらず、爾らば云何に言ふ。培養する差別（地水等）より生ぜられたる變異の差別より生じ、その中大（ḥByuṅ Ba）の種類にして芽を成就せしむること有る所のものは、それ（其芽）の種子にして、余（の大の種類卽前の種子の分位の大種＝稱友）にはあらず。（種子の分位破壞せられざる時に於て尙＝稱友）起るべき名によりて、或は（大種變異する差別は培養の差別より生ずること丶＝稱友）等しきが故に、前の相續は又種子と言はるべきなり。その如く此處に於ても亦彼異熟より、若し正と正にあらざるとの法を聞く等の緣より生ぜられたる有漏善或は不善の心の變異生じ、それより別の異熟生ずる時生じて、他にはあらざるが故に此は（立義）と等し。或はそはかくの如く言

應、知二此義一、譬如下從二勒荷汁所、點摩東籠伽華一、相續轉異所、生、於二果內一赤色顯得、生、從、餘不上生、如、此從二業所、生果報一、別果報不、得、生、若由、如二前所說道理一、此則得、生、

隨、麤如二我智慧所、知、此理已顯、由三種種勝能有二差別一、諸業所二重習一、相續至二如、此位一、能生如、此如、此果報、此義唯諸佛世尊境界、此中說、偈、

業熏習勝類
果報位及淨
由二一切種理一
離、佛餘不、知
佛經理互應
解眞義勝量

非二從、餘生一、故喩同、法、或由二別法一類、此可、知、如三拘櫞花塗二紫礦汁一、相續轉變差別爲、因、後果生時、瓤便色赤、從二此赤色一更不、生、餘、如、是應、知、從二業異熟一更不、能下引二餘異熟一生上

前來且隨二自覺慧境一、於二諸業果一略顯二麤相一、其間異類差別功能、諸業所熏、相續轉變、至二彼彼位一彼彼果生、唯佛證知非二餘境界一、依二如、是義一故、有頌曰、

此業此熏習
至二此時一與果
一切種定理
離、佛無二能知一

はるべし、凡て摩東籠伽（Mātulunga）の花明脂（Rgya-Skyegs; lākṣā 卽 lac 勒荷）の液によりて色變せられたるにより、果の中に於て相續轉變する差別より生れたる赤き雌蕊生ずべし、而もそれ（赤）より他生せざる如く、その如く業より生せられたる異熟より更に他の異熟は生せず。

此廣大なる程は我の覺によりて識得せらるべきもの說示せられたるなり。「種々の能力によりて差異せる諸業によりて薰習せられたる諸相續（が）此分位（gNas-skabs）に到りてかくの如き果現に成就せらるべし」と言はるゝは唯佛の境なり。又言へり。

業とそれの熏習とそれの與及取と
其（與及取）よりの果とは、佛より
他のものによりて、一切種に於て
決定して能く知られず。

依二一說一無傷一
何用難墮身
如レ此善立二理清淨一
已見二諸佛敎法爾一
盲闇種種邪見行
願捨二外執一得二明行一
此涅槃土一廣道
諸佛日言光所レ照
衆聖行熟二無我理一
雖レ開二昧眼一人不レ見
佛世尊告二富婁那一
汝等正勤持二此法一
若人依レ此修二觀行一
必定皆得二五五德一
如レ此已顯二正義方一
爲レ開二智人智毒門一
願彼捨二離外邪執一
爲二自及他一得二實義一
阿毘達磨倶舍釋論卷第二
十二

已善說二此淨因道一
謂佛至言眞法性
應下捨二闇盲諸外執
惡見所爲求中慧眼上
此涅槃宮一廣道
千聖所レ游無我性
諸佛日吉光所レ照
雖レ開二昧眼一不レ能レ覩
於二此方隅一已略說
爲レ開二智者慧毒門一
庶各隨二己力堪能一
徧悟二所知一成二勝業一
阿毘達磨倶舍論卷第三十

その如く「諸佛の說法如理の道
善く說かれたる清淨、此法性」を見
盲なる外道と種々の惡見と諸詐との
宗を捨斷して、諸の非盲は行く。(1)
「如來日の言の光によりて
輝有る涅槃宮の一道
無我千聖の進み行く」此處は、
開かれたりと雖も尙劣れる眼によりて
見られず(2)

その如く此方隅(建言)は
「自力によりて增盛し
毒に傷ける方隅(見解)」に從つて
諸智賢の爲に說かれたり(3)

對法藏中「補特伽羅を滅すべき敎」(Gai-Zag dGag-ja bStan-Pa) と言はるゝ藏の第九

處なり。此「對法藏の釋、論師釋迦の比丘世親（dByig-bZgen）によりて造られたる」は完結す。

印度の堪布（mKhan-Po）勝友（Jinamitra）と大校訂譯家法師バル・ツエク（dl'a-lBRtse-gs）とによりて飜譯せられ、允許を請いて刊行せられたり。

附記。

前號所載の本稿中、繕論に於ける各俱舍論釋の梵名、abhidharmakośa とせしは abhidharmakoṣa の誤。破我品譯中對犢子部の初、一八頁の第八行に「若し乳等の如く一般とせしは、チ氏及エ氏の辭書によりかく譯せしものなるも、該「一般」Spyi は梵語 Samudāya に相當し、集團等の意味ある文字にして漢譯に聚集とあるに相當す、チ氏及エ氏藏英辭書の意味を苟に取りたるもの又、四一頁、第六行、「補特伽羅（は三世に）あらず」は「補特伽羅（を許すに）あらず」とありて然るべきもの、此等は稿了後に氣付きたる誤の二三なりこゝに訂正す。（山口）

（大正十年三月三日稿了）